

「平和集会を通して、私が学び、得てきたこと」

1：はじめに

今年で本校勤務11年目を迎える。この11年間、平和集会・平和劇には、ほぼ毎年関わってきた。二日市中学校では、1988年から行われている平和集会。この伝統ある平和教育の在り方を通して、私自身が教師としての根本的な考え、生徒感を学ぶことができた。また、生徒会担当として、さまざまな生徒会活動を通して、二中学生徒会の3本柱である「人権」「平和」「共生」をどのように具体化していくか、また、これらの精神をもった生徒の育成について取り組んできた実践を振り返る。

2：平和教育との出会い

私が二日市中学校に赴任した2007年は、平和劇が休止した2年目であった。翌年、2008年赴任したK先生のもと、二日市中学校平和劇が復活した。しかし、8月6日の実施は難しく、7月に本校体育館で、生徒会役員20数名のスタッフで実施した。7月とはいえ、照明のために体育館の暗幕を閉め、演者も観劇者も汗だくになりながら行われた。

復活第1弾のテーマは、「沖縄戦」。当時の日本軍人と地元住民に起きた悲劇について、表現した。これが、教師として平和教育との初めての出会いだったと思う。

3：現地報告担当として学んだこと

2009年より私は、現地調査報告を担当した。平和劇の前に、担当生徒とともに、実際に起きた場所に行き調査を行ったり、体験者の方にお話をお聞きしたりし、プレゼンテーションにまとめ、劇では演出しにくいことや伝えにくいことを朗読で伝える部分である。

さまざまな情報を集め、担当生徒とともに、より質の高いものをつくるために奮闘し、「完璧」と自分たちで言えるまで内容を練り直した。

今でも忘れることのないK先生からの一言がある。それは、調査報告の部分が完成し、総監督であるK先生にチェックをお願いした時である。K先生の口から出た言葉は、「アカデミックだね」だった。私は、褒められているのか、ダメ出しをされているのかわからなかった。おそらく、K先生も否定も肯定もしない、直観の感想だったのだと思う。しかし、私はその言葉を聞いてハッとさせられた。

自信満々でいる自分が恥ずかしくなった。私は「研究者」になってしまっており、本来の「教育者」の立場を忘れてしまっていることに気づいたからである。

この平和集会・平和劇を通して、子どもたちにどんなことを感じ、学び、どんな大人になってほしいかという教育において最も大切なことを見失ってしまっていたのである。

4：平和教育に対する自分の考えの転機

平和集会に関わるようになり、また生徒会担当になり、つくづく感じることは「子どもたちは有能である。時には、大人以上に…」ということである。平和劇では、限られた準備時間の中、毎年、素晴らしい作品を創り上げ、大人ではできないほど強烈なメッセージを訴えることができる。

教育基本法第1条には、

「(教育の目的) 教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

とある。ここでの「人格の完成」とは、目の前にいる生徒を、この地球上から戦争や紛争、差別や抑圧のない世界を希求し、行動できる大人にすることではないかと考えた。

しかし、私の中でもやもやするものがあった。それは、子どもたちにどのような実践力を身につけてほしいのか自分の中で明確にすることができなかつた。平和集会・平和劇の取り組みを通しながら、自問自答を繰り返した。

その目の前に広がる厚い霧は、ある人の言葉によって一気に晴れていった。

2012年福岡大空襲をテーマに平和劇を行った時である。おとなになれなかつた弟たち……の作者、米倉斉加年さんに観劇して頂き、劇の後に講演を行って頂いた。米倉さんは、目に涙をためながら、「平和とは生きること。陰で働いている人がいるから社会が成り立っている。立派な人間にならなくていい。人を殺す、だますような人にならなくていい」とメッセージを生徒に送って頂いた。また、「こんな素晴らしい劇をする人間は、絶対にいじめなんてしない。」とも。

このお話を聞かせて頂き、私の中で今までもやもやしたものがはっきり見えた気がした。過去のことをどれだけ知っているかという知識も必要だか、今日、みんなが幸せに生きるために、幸せに生きることができる日を継続していくために、具体的に行動できることが大事であるということである。

それから私の生徒に対する声かけは変わっていったように感じる。今までは、「〇〇あるべきである」という自分の考えを一方的に伝えていたように感じる。しかし、「私は〇〇じゃないかと思うけど、あなたは どう思う?」「あなたは どう思うの? どうしたいの?」というように生徒の考えや行動意欲を尊重するようになった。

すると、生徒たちは考え、悩みながらも「〇〇したい」という「意志」を持つようになった。

5：多くの人と場所との出会い

2008年に二日市中学校の平和集会・平和劇が復活してから、多くの場所に現地調査に行き、さまざまな方と出会い、多くのことを教えていただいた。中でも印象的だったことをいくつか紹介する。

まず、2011年に取り上げた「筑紫駅銃撃事件」である。当時、電車に乗られていた方や、近所にお住まいで救出作業に携われた方からお話を伺った。現在の資料では80名程度の死者となっているが、実際はその倍以上、200名近くの方が亡くなられていることを知っ

た。そして、現場の生々しい雰囲気を経験者からうかがうことができた。

次に、2013年には、実際に福島へ生徒とともに行き、被災地を見たり、福島県の高校の先生、地域を活性化している方からお話を伺った。報道でしか知りえることができなかった現状が、直接、当事者からお聞きすることができた。

2015年、人生で2度とない経験をさせていただいた。平和集会実行委員のOGが高校生平和大使に任命され、スイスのジュネーブにある国連本部に行くことになり、私はスタッフとして同行することになったのである。国連本部はもちろん、IPB会長、ICAN代表などと会談する場に立ち会うことができた。この平和の旅を通して感じたことは、高校生が中心に行っている核兵器廃絶署名は微力かもしれないが無力ではなく、世界に反戦・平和の訴えを伝えることができているということ。また、活動家の多くが私と同年代か若い世代が多いということ。世界には、日本以上にさまざまな考えを持っている人がいて、その人たちの考えを知ることが大切であるということであった。この旅を通じて、私自身、勇気をもらうとともに、もっと多くの人たちと出会い、自分自身の感覚を高めていくことが必要だと感じた。

6：手渡されたバトン

2015年度、今まで平和劇の総合演出を担当し、平和集会・平和劇を牽引してきたK先生が異動となり、今年から私がその代役となった。今まで劇をつくったことはない。ましてや演劇指導なんてしたこと、知識なんてゼロである。

そんな状況で、力を貸してくれたのは、平和劇を経験した生徒たちであった。一緒に作っていきこうという雰囲気が自然にできあがった。彼らとこだわったのは、人が死ぬシーンや血が流れるシーンを直接見せたくはない。でも、劇を見た人が、見失っている「大切なもの」を再確認できるような劇にしたいという点であった。

テーマは、大刀洗空襲。よく知られているのは頓田の森の悲劇である。また、大刀洗飛行場は特攻隊の本校であったことである。そこで、そのことを触れながらも、「家族愛」について問う内容に決まり、具体的な台本や演出を生徒と創り上げていった。

毎年思うことだが、この年に涙が流れるほどに感じたことは、生徒たちは素晴らしい感性、感覚をもっており、自然に互いを高め合えるということである。

劇の練習が始まり、私が行うこと（できること）は、「いい」か「悪い」かの判断である。「悪い」という判断はできるが、だからといって具体的な修正案までは提示できない。しかし、生徒たちは、自分の役のパックグラウンド、時代背景などを議論し合い、よりより表現方法を模索し、試してみても修正するという作業を繰り返し、劇を創り上げていった。

大道具や衣装なども、インターネットで調べるだけでなく、キャストに意見を求めるなどしてよりよりものを創り上げていった。

7：平和集会・平和劇の取り組みを通して変わっていく生徒の姿

生徒Aは、2015年に入学してきた生徒で毎年、平和集会実行委員会に参加している。担任はしていないが1年次より代議員となり、生徒会担当として関わる機会が多くあった。Aは自分の気持ちや考えを持つことができた。しかし、「〇〇が嫌だ」「このままじゃだめだと思う」という状況に対する指摘はできるが、具体的な対策や改善する行動までは至ら

なかった。

2年になると、Aの存在は学年でも認められるようになり、修学旅行実行委員長に選ばれ、人前で話す機会も増えてきた。そうすると、単なる指摘ではなく、具体的な方向性を示すことが必要になる。そのころから、放課後や休み時間などAと話をする機会が増えてきたように感じる。学校の話、日本や世界の話まで、幅広い範囲の話をいろいろとした。

私は話の中で、「で、あなたはどうしたいの?」という平和集会の準備段階と同じような問いを必ずやっていたように感じる。はじめのうちは、何ができるのか、何をしたらいいのか悩む様子だった。しかし、少しずつ、自分の思いを行動に移せるようになっていった。

2016年熊本地震。福岡から近い場所で起きた大災害ということもあり、Aから「なにか私たちにできることはないんですか?」「現地にボランティアに行きたいんです!」など廊下で出会う度に、申し出があった。

そこで、話し合いを行い、救援物資を全校生徒に呼びかけ集めることになった。約5日間で、飲料水、トイレットペーパー、タオルなど全校生徒が自分にできる範囲で救援物資をもってきた。昇降口前に回収場所を設置していたが、数日であふれるほどに集まった。その集まった物資を見て、Aと驚きとうれしさを共有した。きっと「思いを行動にすれば、必ず良い結果が得られる」と自信をつけたようであった。

その年の市民フォーラムにAは参加し、「筑紫野市内五中学校生徒会連合体」の提案を行った。このような生徒会による活動を二日市中学校1校だけでなく、5中学校足並みを揃えることで大きな力にしたいという願いからであった。それから、約半年間、構想を練り、校長先生にも何度となく相談し、ついに結団式を行うことができた。

8：今後の教師の在り方

ここ数年のうちに、生徒たちの生活環境は大きく変化をしてきている。文部科学省の『全国学力・学習状況調査』(2015年)によると、全国の中学3年生の携帯電話・スマートフォンの平均所有率は78.6%となっている。また、“今の子供たちの65%は、大学卒業時に、今は存在していない職業に就く”、“今後10~20年で、雇用者の約47%の仕事が自動化される”とは、2011年8月にニューヨークタイムズに掲載されたcathy davidsonの言葉である。

将来の変化を予測することが困難な時代を生きる子どもたちに対して、何をどれだけ知っているかということではなく、知ったことから何を感じ、何を行うのかという実践力が求められている。まさに、平和集会・平和劇の取り組みは、生徒の主体的な学びによって成立している。

このことからこれからの教師に必要なことは、教師が生徒たちを信じ通すことである。そして、ルールを敷くのではなく、進むべき方向性を指し示す。教師は、「目標」を明確にしつつも、「目的」に重点を置き、生徒に「目的達成」に高い価値観を持たせること。そうすることで、子どもたちは他者と関わることの価値を体感し、そして、よりよい関係を構築する方法を試行錯誤して見つけていく。この作業を繰り返すことで、集団は自他を尊重し、そして、効果的な結果を生み出す集団となっていく。

この子どもたちが、大人になり、今までに経験したことのない社会で幸せに生きていくためには、今まで経験したことのない教育が必要だと考える。